論 説

宮城県追波湾及び附近の島に蕃殖する
二三鳥類についてNotes on some birds breeding on the coast of
Oppa Bay, Miyagi.立 花 繁 信
Shigenobu Tachibana

岩手県や青森県の島嶼の鳥については、よく調査されているが、宮城県の島嶼や岩礁は足島を除いては余り調べられていない。それだけに宮城県の三陸沿岸の島嶼、岩礁は鳥類の蕃殖地としては興味深いものがある。

追波湾及び附近の島々は、面積 1 反—5・6 反歩の狭いものであるが、村の青年団の力によって蕃殖する鳥類はよく保護され、宮城県でも重要な地としてこの附近一帯の沿岸と島嶼を保護区に指定し、ウミネコ・ケイマフリ・ハクセキレイ等の保護を計っている。特に双子島（3 島よりなる）の中には登攀不能の島があり、これにはケイマフリ・ハクセキレイ・ウミネコ・アマツバメが蕃殖している。面積も広く、東部は 40 m の絶壁だが、頂部には赤土が深い。夏季、ウトウ・ヒメウ・ウミウも観察され、蕃殖の可能性が充分考えられるので最も価値ある島である。

筆者は 1950 年以来、この地の鳥類の棲息状況や蕃殖について調査を進めて来たが、荒天・濃霧・登攀不能にわざわざされ、又撮影中にカメラを落したりして、調査が行届いてない点が多い。しかし本年は、5 月 17 日、5 月 27 日、6 月 24 日、7 月 1 日と割合に調査に恵まれたので、簡単に報告する次第である。

ハクセキレイ *Motacilla alba lugens* Gloger

この地のハクセキレイの蕃殖については、故熊谷三郎氏により発表されている（1954）が、この附近の島嶼には極めて普通であって、どの島にも 3・4 番は確実に蕃殖している。筆者の調査によると、志津川の荒島（3 巣：3/VIII, 1955, 1 巣 5 卵：27/V, 1956）、桃生郡北上村鞍掛島（1 巣 2 卵：9/V, 1954）、

同松島（育雛中：1/VII, 1956）, 同^{ふたご}双子島（4 巢, 1 巢 5 卵：1/VII, 1956）, 桃生郡河北町走ヶ崎（育雛中：15/V, 1953）等, いずれも海岸から 1 km 以内の小島である。巢は岩地に生じたハイネズ *Juniperus rigida* Sieb et Zucc.

第 1 図 ハクセキレイの巢卵, 主材はアマモである。(1956・5・27 宮城県本吉郡志津川町荒島) Nest and eggs of *Motacilla alba lugens* in Miyagi.

var. *conferta* Makino の下や草間にあり, 外径 11-20 cm 内径 6.5-8 cm 深さ 3-6 cm 高さ 7-23 cm 位。巢材は外部は禾本科植物の枯れた茎葉を主材に使うが, 志津川の荒島のものは, アマモ *Zostera marina* L. の打上げられたのを使用していた。座座にはどの巢にもウミネコの羽毛と細根が用いられていた。12 卵の測定は $19.8-23.1 \times 15.0-17.0$ mm であった。卵殻の色彩は, 志津川の荒島のものは灰褐の地に紫褐斑点が一様に密在しており, 双子島のものは灰青色の地に紫褐斑があり, 鈍端に密在していた。親鳥はセグロセキレイ *Motacilla grandis* よりも遙かに警戒性強く, 抱卵期, 育雛期といえども容易に人を近づけない。

卵期は上記の様に 5 月上旬—7 月上旬となっているが, 8 月 9 日に 4 雛づれの親子を観察しているので 7 月一ばいまでであろう(立花: 1955)。なおこの附近の小島には, セグロセキレイは全くみる事ができなかった。

アマツバメ *Micropus pacificus kurodae* (Domaniewski)

本種は宮城県の内陸では天候の悪化して来た時に多く認められ、晴天の時はあまりみられない種類である。ただ、奥羽山脈中の熊野岳 (1841 m) の断崖に蕃殖しているから、その地方ではみられる。しかし、今までは本県内から巢卵の発見は無かったらしい。これは、登る事が不可能な所に営巣している為と思われる。三陸沿岸で晴天の日もみられるのは、晴れていても海が荒れている為によるのであって、島嶼の絶壁に営巣しているものと筆者は想像していた。土地の人達に聞くと“いそつばめ”なら双子島に沢山いるとの事だった。“いそつばめ”が何種なのか甚だあいまいなので、或はミウツバメの類ではないかと期待していた。先年5月8日には双子島には認められなかったので多少の不安もあったが、1956年7月1日に棲息していないといわれる双子島中真中の島の島に上陸して、たちまち6巣を発見したが、これはアマツバメであった。いずれも抱卵中であり、近寄っても逃げようとせず、じっとしているが、手を伸ばすとやっと腰を上げ、奥の方へ逃れるが飛ぶ様なことはしない。これは翼がつかえて飛べないからだと思われる。岩壁に構築したり、巣を粘着したものは全くみられず、岩の亀裂や隙間にあり、巣穴の深さは45-200 cm 位あった。6巣の測定は外径9-13 cm、内径7.5-9 cm、深さ1 cm 位、高さ1.5 cm 位で、巢材は禾本科植物とウミネコの羽毛を混ぜ合せ、固く締っている。6巣中に孵化後5日位の2雛が入っているのが1巣あったが、他は3卵のもの4巣、2卵のもの1巣で卵は純白、14卵の測定は $26.6-28.0 \times 16.8-17.8$ mm を測定した。卵は5月8日にみられなかったので、この6巣より推定すると、卵期は6月1-7月でないかと思われる。双子島中最大の南の島には洞穴や大きな亀裂が多数あるので濃霧の中を数100羽の群が乱舞していた。

なおこの島の対岸の小滝という部落にはアマツバメが人家に営巣しているという。未だ調査してないが可能性はある。

ゴイサギ *N. n. nycticorax* (Linné)

鞍掛島には1000番位のウミネコと100番以上のゴイサギが混棲繁殖している。小高い所から島を眺めると、成鳥に混じって沢山の星五位が岩上やハイネズの枝上に止っている。陸から島までは6 m 位しかないので梯子を掛けるが、その時、飛翔可能のゴイサギは一斉に離島して、人が去らねば帰らないが、ウミネコは近寄らなければ飛び立たず、飛び立っても遠くへは行かずすぐ舞い戻る。

6月下旬に充分成長を遂げ、採餌も自由なものもあれば、巣立直後のものもあり、巣立直前のもの、中雛、孵化直後のもの、卵期のものと種々である。又

各巢の雛の発育も不斉で1雛位ずつ極めて遅れたものが観察された。卵期の16巢について調査したところ、卵数は3-4個のものばかりであった。この島のゴイサギは、ハイネズやマサキ *Euonymus japonica* Thunb. の枝上に営巢し、

第2図 ハイネズの根際の地上の巢のゴイサギの雛 巢中の卵及び羽毛はウミネコのもの。(1956・6・24 宮城県桃生郡北上村鞍掛島) Chicks of the Black-crowned Night Heron in the nest on the ground, Kurakake I.

高さは50 cm以下で、地上営巢のものも30%に達し、ウミネコの巣にすぐ隣あっているものもあり、中には、ウミネコの無精卵が雛のいる巢内に転がっていたのもみられた。雛は脚が丈夫なので、人の姿を認めると相当のスピードでハイネズの下をくぐりながら逃げる。孵化後、間もないものは歩けないので、巢内にうずくまってはいるが、枝の下に頭を入れ眼ばかり出して様子をうかがう。食性は海産動物は全くみられず、アカガエル *Rana japonica* Guenther やカナヘビ *Takydromus tachydromoides* (Schlegel) 等がみられた。

ウミネコ *Larus crassirostris* Vieillot

松島・洞島・蹄島・鞍掛島・双子島に繁殖し、その総数3万羽という。松島には数本のアカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. が生えているが、他は1 m以下の灌木を僅かに見るだけで、特に洞島・蹄島には、禾本科植物 *Gramineae*・カヤツリ草科 *Cyperaceae* の植物が少し生じているだけで、殆んど

粘板岩が裸出してみえる岩礁である。天然記念物に指定されている江の島列島中の足島から、近時、この島々に移棲するものが多くなったといい、この地に定住するものも少数認められる。これらの島々を合せても足島の面積よりも狭

第3図 鞍掛島頂上のウミネコ（この島でウミネコとゴイサギが混棲している）(1956・6・24) The Black-tailed Gulls on the top of Kurakake I.

く、巣材も遙かに少ないが、密度は大である。卵期は4月下旬—6月上旬で、6月下旬(24/IV, 1956)に入ると卵は殆んどみられず、2卵・4卵の2巣を発見し得ただけであった。変わったところではオリーブ色の無斑卵を観察した。

5月中旬頃より多数群れて追波川を遡上し、水田に下り餌を漁る。これは水田に撒いた魚粕を食う為だと大いに農家の激怒を買った。確かにそれらしい所作もあるらしく観察された。しかし、本年は水田に全然魚粕を使用しないが、やはり、多数舞下りて例年の如く摂食していた。これは代掻の為に弱って浮いた土中・水中の生物を漁るためだろう。1956年6月3日に志津川の田中完一氏が双子島を小舟で調査中、タカ(種名不詳)とウミネコの格闘を詳しく観察されたそうである。筆者も7月1日に松島でトビ *Milvus migrans* が雛をさらったのをみているが、島々に居るウミネコが一斉にパッと舞上り、大声で鳴き立てた。東方500m位の所にトビの姿が認められた。島上でぐるぐると輪を描いた時、ウミネコは叫びなが西方へ逃れ去った。間髪を入れず、サッと舞

下り雛をつかみ去ったが、この時、引返したウミネコはクワクワァーと鳴きながら追って行った。

雛に与える餌は、イカナゴ *Ammodytes personatus* Girard が多く、成長した雛を怒らせると、6-7 cm のイカナゴの団子、10 匹位を吐く。又、糞が赤いのはイカを食べる為で、イカの軟骨が多数の巢にみられた。中には 18 cm のヤリイカ *Doryteuthis bleekeri* Keferstein を吐いたものもあった。

ケイマフリ *Cephus carbo* (Pallas)

ケイマフリの蕃殖地として、本州からは青森県下北郡九艘泊沖の弁天島、同尻屋崎沖の弁天島・阿部崎、岩手県下閉伊郡崎山村姉ヶ崎、岩手県上閉伊郡三貫島、同釜石湾内大刀ヶ根島から知られている。しかるに、1954 年 5 月 8 日に熊谷三郎氏らと共に双子島に於いて 1 卵を発見し、64×45 mm を測定している(熊谷：1956)。巢は岩石の間隙にあり深さ 35 cm 位だった。1956 年 7 月 1 日、この双子島の真中の島に上陸し、観察したが登るのが精一ぱいで、巢卵の発見もあったが、断崖であり、相当の深さのところなので、測定も撮影もできなかった。南の島には、確実に数番が蕃殖して居り、育雛中のもの少なくとも 2 番はあり、餌を運搬しているのを観察した。産卵期は 5 月上旬—7 月上旬までは確実であるが、恐らく 7 月一ぱい位だと思われる。韓国では 4 月—5 月樺太・千島では 6 月—7 月が知られている(清棲：1952) 岩上に休む場合は跼蹠までつけて体を立てているが、飛び跳ねる時は両足を揃え、趾を使用し、なかなか速いものである。岩上で鳴く時は真赤な口中が鮮かにみえる。

文 献

- 熊谷 三 郎 ハクセキレイの新蕃殖地 野鳥 19 (5) : 49-50, 1954
 立花 繁 信 鳥声断片 (II) 野鳥 20 (1) : 69, 1955
 清 棲 幸 保 日本鳥類大図鑑 III pp. 840-841, 1952
 熊谷 三 郎 宮城県史 vol. 15, 博物 pp. 39-40, pp. 78-80, 1956

Résumé

Observations on the following breeding birds are reported :

Motabilla alba lugens Breeds may to July on the islands: Are, Kurakake, Matsushima, Futago and Hashirigasaki on Shizugawa Bay coast. Its nest material is the seaweed, *Zostera marina* L.

Apus pacificus kurodae Breeds on Futago Is. The egg dates are June to July.

N. n. nycticorax Beeds on Kurakake I. together with *Larus crassirostris*. It Nests at the height not more than 50 cm. from the ground and 30% of the nests were found on the ground.

Larus crassirostris Estimated as thirty thousand, breeding on several islands. Lays eggs from middle April to early June. The chicks often taken by kite.

Cephus carbo Breeds on Futago Is., laying eggs during May and July.